

『東方』二九八号より

「生きる人たち」の声から 検証する中国農村の実情

佐々木衛(神戸大学)

1

著者は、本書の趣旨を次のように説明している。「本書は、中国湖北省のある農村地域を対象に長期的に行なったフィールド調査から得た資料に基づいて、主に当該社会の伝統的な親族制度、即ち家族や宗族、婚姻関係及び人々の生死観の実態、解放後社会主義近代化の過程で起きた諸変化を具体的に記述、考察する民族誌である。また、この事例研究から従来の漢人社会の研究に新しい民族誌の資料と視点を加えることを意図とするものである。」(一頁)

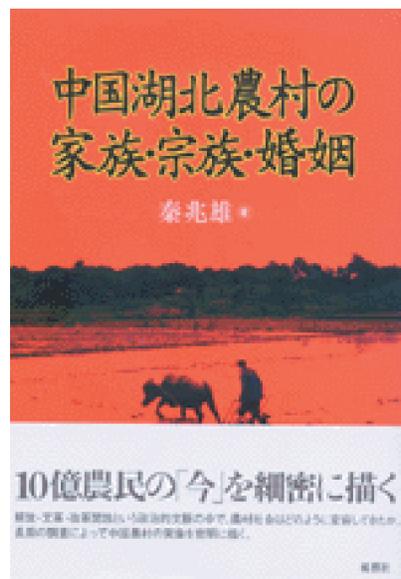
本書は、漢人社会における家族、宗族、婚姻を特徴づけている父系の出自と血縁原理を、改めて検討しようとする意欲作であるが、本書の特徴は、次の三点にあると考える。まず第一は、宗族、親戚関係を、既に出来上がった対象物として、あるいは自律的に規定される客体的なものとして見るのではなく、関係を構成する担い手の主体的行為として考察しようとするところにある。中国の家族と宗族をめぐる議論も、この視点から批判的に検証されている。

第二は、本書は、著者の故郷をフィールドとして実施した調査の資料に基づいている。フィールドが生まれ育った故郷ということから、一時的な滞在者にはうかがうことができない事件とその関係者たちの情報を集めることができず、離婚や再婚、家庭内の不和など、農村のなかでよく見聞することであるが、村の人にとってはよそ者には聴かせ

▶ トップページにもどる

秦兆雄著

『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』
A5判・三五〇頁・風響社・六、三〇〇円



たくないことで、外来者が当事者に顛末を確かめることは難しい。本書には、このような出来事がいくつも紹介されており、精彩を放つ要件となっている。

第三は、各章とも、これまで展開されてきた理論を批判的に検討して問題点を指摘し、この上で、収集した資料から論点を検証するという構成になっている。参照されている文献は古典となっており、その中心に涉猟されており、著者の意気込みを感じさせるところである。

さて、本書の構成は次のように、一章から九章と、これに序と終章とが加えられている。

序

第一章 調査地の概況

第二章 宗族と政治と経済

第三章 家族の変化過程

第四章	婚姻形態
第五章	招婿婚
第六章	イトコ婚
第七章	宗族内婚
第八章	生の儀礼と計画出産
第九章	死の儀礼と火葬
終章	村人の生活——明日への展望

2

調査地は、湖北省の武漢市から北西に約一四〇キロメートルの村である。同姓集団が中核となって構成する六つの自然村からなり、二六二世帯、人口は一〇二七人（一九九八年）で、華北地域の集落に比べると、かなり規模が小さい。農業は、水稲と小麦、綿花、大豆、西瓜の栽培、牛や豚の飼育が主である。この他の生業は、一九八三年に建設された煉瓦工場、建設会社への出稼ぎ、家畜や農産物の販売である。小売店やレストラン、精米所、搾油工場が経営されていると記述されているが、掲載されている写真などから推察すると、ほとんどの家族が農業に従事する農村地域と見える。調査は二〇〇四年まで継続されており、外来者の増大や村外への出稼ぎ者の記述もあるが、調査時点では、村の社会生活を大きく変えるまでになっていないと報告されている。

本書の中心的な課題は、家族、宗族、婚姻の形態が、解放前、人民公社時代、人民公社解体後の時期に、どのように変容したかという実体的な検証にある。本書から得られた知見をいくつか整理してみよう。

(一) 宗族

① 宗族が統合・維持されていくプロセス、および分節

▶ トップページにもどる

化・拡散していくプロセスは、宗族の政治的・社会的な機能と親族原理によるばかりでなく、このプロセスを担う人々の価値観や状況判断といった主体的な行為に注目しなければ正確な理解はできない。

② 土地改革以前においては、大きな成員をかかえる大姓集団は、世代を下るごとに下位の始祖を中心にした分節集団を構成し、有力者がいる分節集団の祭祀は盛大になった。

③ 土地改革は、社会的にも階層的にも周辺の人によって担われたので、宗族との軋轢を生まなかった。

④ 人民公社は、宗族集団の社会的な機能を弱体化させ、自分の家族をはじめとする宗族近親者、「親戚」という個人的なレベルでの身近な関係が重要になった。

⑤ 現在の村の幹部は宗族内の有力者であるが、彼らの権力基盤が宗族の支持と関連しないため、宗族機能を復活することに関心がない。

(二) 家族

① 土地改革期、集団化期を通して、家族の形態に大きな変化はなかった。

② 人民公社の初期は、村民すべてが村の食堂で食事をするなど、集団主義、互助協力、平等主義が強調されて、「分家」を志向する個人主義的欲望が抑えられた。

③ 人民公社が解体後、村の幹部も家族問題に関与しなくなったこともあり、父親の家族統括力は低下した。

④ 現在は、兄弟のうちの一人が結婚すると「分家」をする傾向にある。

⑤ 嫁の独立心も強くなり、夫の両親の老後の扶養をめぐってトラブルが頻発するようになった。

⑥ しかし、少子化が進んでいるにもかかわらず、男子の誕生を望み、女子よりも男子の教育を重視する考え方は強

く、「伝宗接代」（世代の継承）による家族の父系存続は今日でも依然として重視されているという。

(三) 婚姻

① 解放後、伝統的な婚姻習俗の一部、早婚、蓄妾、「童養媳」（幼い息子の嫁として育てた女の子）、「搶婚」（略奪結婚）は禁じられた。

② 土地改革による階級区分によって、地主階級に認定された家族の子弟は、階級身分制度の廃止（一九七九年）まで、結婚は難しかった。

③ 農村戸籍と都市戸籍との区分によって、都市と農村の通婚関係は閉ざされ、調査村でも恋愛悲劇を生んだ。

(四) 招婿婚

① 当地では、兄弟または従兄弟の息子を養子にして系譜をつなぐ「過継子」よりも、族外の男子を改姓・改名させて娘と結婚させる「上門女婿」の慣行が好まれる。

② 「上門女婿」が選好される理由として、宗族内の男子よりも、自分の血を引いている娘の方が「身近で信用できる」からだと村人は説明している。

③ 「上門女婿」に迎えられる男子は、貧しい家庭の息子が選ばれた。また、父系血縁関係が強調される文化的、社会的な環境で生活する限り、彼らは常に劣位に置かれ、しばしば軽蔑されがちである。

④ 土地改革の後、社会的な地位が反転し、宗族意識が公の場では否定されたため、復姓したり、妻と子どもを連れて出身村に帰る事例が出てきた。

(五) イトコ婚

① 当地では、イトコ婚は少なくはないが、父方交叉イトコ婚（父の姉妹の子どもの結婚）は一例あるのみである。父の姉妹は、父と同じ父系血縁集団に属している成員だと

▶ トップページにもどる

見なされている。

② 母方交叉イトコ婚（母の兄弟の子どもの結婚）、母方平行イトコ婚（母の姉妹の子どもの結婚）は積極的に奨励されているのではなく、許容されている程度にすぎない。

③ 母方平行イトコ婚は他人同士に近い結婚として理解されている。

④ 村人にとって「親戚」間の通婚が可能かどうかは、「父系血縁関係」にかかわる問題と見なされている。

(六) 宗族内婚

① 宗族内の結婚は忌避されてきた。

② 二〇〇一年に三組の宗族内婚の事例が現れた。これらの事例に共通することは、「五服」（祖父の祖父から孫までの親族）の範囲を出た遠縁の関係であること、都会もしくは遠くに出稼ぎに出ていることがあげられる。

③ 過去、「五服」の範囲を出た関係にある男女が恋愛をしたが、異なる世代間（女性は伯母の世代にあたる）であったため、周囲から反対された事例が二件ある。

3

以上、本書の主要な論点に関して概要を紹介した。本書は、家族、宗族、婚姻の形態の変容を、行為者の判断や選択という個人的な視点を重視して検討しようとするものである。著者は、したがって、宗族におけるフリードマンの機能主義的解釈や（注一）、イトコ婚におけるレヴィーストロースの構造主義的解釈（注二）などに対して、機械的あるいは客体的な秩序を感じて、フィールドで得た事例に見られる「生きる人たちの息づかい」から検証を試みようとしている。調査地は著者の出身地であるため、老いた親たちの扶養をめぐる家庭内のもめ事、許されなかった恋愛事件

など、「生きる人たちの息づかい」がもつとも顕著に、そして象徴的に現れる事例を蒐集しており、本書の趣旨と事例とが首尾よく共鳴しあっている。結果として、イトコ婚は忌避される傾向にあり、許容されるとしても「父系血縁関係」の範囲外で認められることや、「上門女婿」として妻方の家族と同居した男たちが、宗族の規範的規制がゆるむといろんな理由をつけて復姓するなど、村の人たちの単純明快な現実を理解することができる。

中国の家族、親族の構成を論じるとき、著者が主張するように、個人の主体的選択、あるいは社会における個人行為の重要性は重要な論点の一つであった。フリードマンは、共有財産の維持やその財産に伴う儀礼的な義務と特権にかかわって統合と分節が形成され、その結果、構造の非対称性、大きな宗族集団への系譜的連合という宗族集団の構造的特徴を指摘したが、しかし、系譜関係がそのまま自律的に宗族を構成するとは見ていない。分節化された大きな宗族集団の形成には、政治的、社会的勢力を出現させようとするエリートが存在を不可欠な要件として指摘している。林耀華が『黄金の翼』(The Golden Wing 一九四七年)で描いたように、大家族の維持は強力な父親の統率力と家族を一体として経営しようとする意志の力でもってはじめた可能であった。さらに、王崧興は中国社会を「関係あり、組織なし」と指摘したが、関係を組織化する主体的行為こそ社会的活動の結び目にほかならない。さらにまた、費孝通は中国社会をフィールドに新しい社会学理論の可能性を展開するが、その一つの論点は、マリノフスキーの生物学的機能を動因とする機能主義、デュルケームの社会学主義を、「社会を見て人を見ない」理論だとし、個人の能動性、主観作用を取り込んだ新たな人文思想の必要を主張すると

▶ トップページにもどる

ころにあった(「個人・群体・社会」、『北京大学学报』一九四四年第一期)。また、日本人の我々の目からすると、中国社会の研究に引きつけられる関心は、『三国志演義』や『水滸伝』の英雄・豪傑を持ち出すまでもなく、それぞれの個人が結び合う活動が社会を構築していくダイナミックにあるといつてよいのではないだろうか。

このようにしてみると、現代中国の社会学、社会人類学の調査と民族誌の記述、そして理論にとつて、個人行為の重要性とはいったい何を意味するのかという問が改めて問われる必要がある。

著者は社会学の方法論的個人主義(注三)で論じられるような個人的行為や適応様式、あるいは価値志向の類型論を論じようとしているのではない。著者は事例を紹介する記述の中に、当事者たちの選択的判断を詳細に描こうとしている。例えば、最近、同一宗族内の男女が結婚する三件の事例が出てきて、村人の中に衝撃的な話題を引き起こしていることが紹介されている。彼らが婚約にいたる事情と、村人の賛否両論、無関心の反応や態度を説明し、族内婚のタブーが弛緩する条件、受け入れる範囲、そして忌避しようとする態度が、当事者と村人の双方から分析されている。この記述の方法は、全くのよそ者が村人の行動や関係の解釈を、祭祀の儀礼や日常生活の仕草などに表現された「もの」のなかに意味を解釈する「意味的解釈」と距離がある。言葉はむろん、村人の日常の立ち振る舞いから考え方までよく熟知したものが、部外者に向けて事件の顛末を説明して見せる「解釈」なのである。

事件を身内のものが部外者に説明するのは、ある種の危険が隣り合う。当事者たちの解釈と言葉を、理論的な枠組みによる検証がないまま使うことがしばしば見受けられる

からである。本書では、例えば、深圳に出稼ぎに行つて金を稼いだ青年に対する村人の評価に、「聡明」、「勤勉」、「将来性」などの言葉が使われている。村の人たちがこの言葉でもつて説明したからであろう。しかし、恋愛事件の渦中にある男女の選択を「愛」があるからだと言明することが事件のリアリティを一拳に失わせるように、出稼ぎで成功した男に対する「聡明」、「将来性」という言葉も、彼らの行為の背景を霞ませているのではないかと感じる。

社会学者のマートンは、「事実にぴたりあてはまる」いかにも尤もらしい解釈を「事後解釈」と呼び、当事者からの社会的距離を構築し、経験を一般化するための指針を「中範囲理論」として提唱した(注四)。文化(社会)人類学が異文化体験によるモノグラフ研究を人類学者としての要件として求めるのも、対象への親密さと疎遠さという距離感の習得が不可欠であるからに他ならない。むろん、著者がこの点で失敗しているというのでは決してない。むしろ、本書はこの危険を回避するのに成功しており、ネイティブによる研究の達成すべき水準を示していることを言いたい。ここで述べようとしていることは、社会的距離をとることが難しく、文化人類学がもつめる異文化研究という条件を満たさないにもかかわらず、現代中国社会研究ではネイティブによる民族誌が重要なのだということである。

現代の中国は、人民公社体制を乗り越えて、グローバルな世界に一気に乗り込んでいる。人々の移動は激しく、家族、村落、単位など、これまで基層社会を構成してきた構造が溶解するかの現象も見せている。基層社会の構造が変容してしまうならば、これを支えてきた行動の基準となつてきた集団の「内部者間の平等、外部者に対する格差」(注

トップページにもどる

五)も、規範としての価値を失うのであろうか。著者は伝統社会を支えた原理を「儒教道徳」と呼んでいるが、儒教と一括してしまうことはできないであろう。人民公社体制のもとで引き継がれた規範的な価値はどのように組み替えられているか、現代都市生活のなかで育まれている個人主義的行動原理は近代西洋に発するものと同質であるかどうかなど、中国社会に関心を持つものなら誰でも提起するテーマであろう。このようなテーマに対して、部外者による象徴的解釈学では、これに答えるにはあまりに非力さを覚える。これまで共有されたとされる規範的な価値と行為の基準がどのように変化したかは、実際にとられた行為とのギャップにこそ明快に現れる。規範的な基準と異なる行為がどのように選択され、当事者によつてどのように説明されるかという問題は、言葉の壁を乗り越えることはむろん、当事者達の世界を熟知したものでないと、とうてい理解できないであろう。また、このような条件を持つものの手によるモノグラフでないと、安心して読めないであろう。社会が大きく変化する節目にある今こそ、ネイティブによるモノグラフの蓄積が、経験世界を一般化し、系統的に整理するためにも必要ではないかと考える。

【注】

一、フリードマンの機能主義的解釈は、宗族内の富や人員の不均衡が下位分節を重層的に出現させるが、それによつて弱体化するのではなく全体の結合を更新していること、地域社会との関連で、親族以外の政治、経済、儀礼組織と密接に結びついていることを説得的に説明している。『東南中国の宗族組織』(末成道男ほか訳、弘文堂、一九九一年。原著一九五八年)

▼『東方』298号より

六 「生きる人たち」の声から検証する中国農村の実情

▲ 佐々木 衛

二、レヴィーストロースは近親婚の禁止を、集団間で相互に女性を迎える互酬的交換の一つの形態として説明した。『親族の基本構造』（馬淵東一ほか訳、番町書房、一九七七年）。原著一九四九年）

三、『新社会学辞典』（森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表、有斐閣、一九九二年）によると、「考察対象をそれ自体としての単一的実在と見なさず、構成諸要素とその相互関係からなるものと捉え、要素としての個体から出発して対象の全体の様態を明らかにしようとするもの」（森博）。

四、『社会学理論と機能分析』所収（森東吾ほか訳、青木書店、一九六九年。原著一九六七年）

五、『中国村落社会の構造とダイナミズム』佐々木衛・柄澤行雄編、東方書店、二〇〇三年）

[トップページにもどる](#)